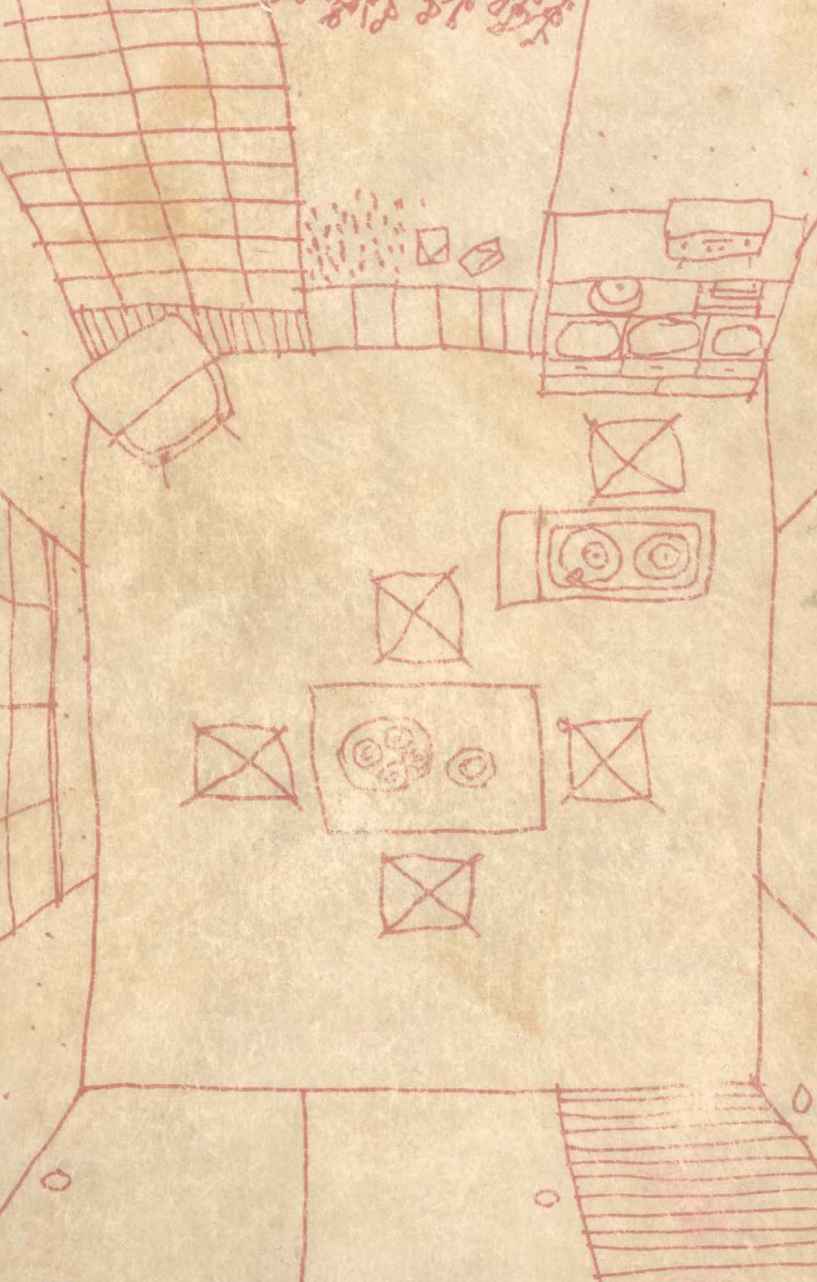
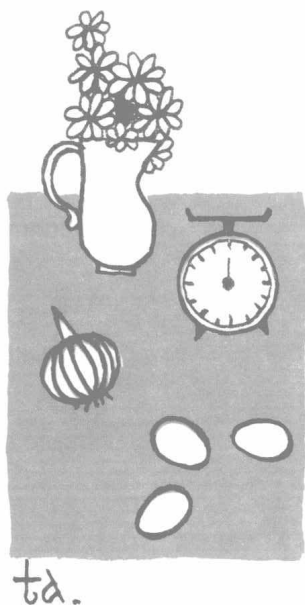




目白三平茶の間騒動記

中 村 武 志



新 潮 社

目白三平茶の間騒動記

昭和三十七年七月六日印刷

昭和三十七年七月十日発行

定価二九〇円

著者 中村武志

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京 (341) 七一一一

振替東京 八〇八番

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 神田・加藤製本所



目次

茶の間のできごと	五
亭主の生態研究会	一八
麻雀大会	三三
温泉マーク事件	四四
お料理『一一九番』	五九
競輪場の搜索	一〇六
遊園地の驟雨	一三三
トースター事件	一四四
豆腐屋の笛	一七三
チャンネル争い	二二四
女房の野球教室	二四六
ナイターの珍事	二六六
別居と結婚	三二九

カ装
ツ
ト幀
宮
田
武
彦

目白三平茶の間騒動記

茶の間のできごと



目白三平の坐る場所が始終移動すること

自宅の玄関のドアをあけると、国鉄本社職員の目白三平は、ほんとと安堵の吐息をもらす。職場とはちがつて家庭には、彼に向かって意地の悪いことをしたり、冷たく批判したりする人間は一人もないからだ。

細君のとし江さんは、目白三平を温かく迎えてくれることは言うまでもないが、結婚生活二十年の現在では、彼女は玄関に出迎えることはほとんどない。その気配を感じ取ると、お勝手から、

「お帰りなさい」

と、声をかけるだけだ。ご機嫌のいい時の彼女は、その後、「雨で大変だったでしょう」とか、「外は

寒いでしょう」などと追加する。

その日は、とし江さんのご機嫌が悪いらしく、追加の言葉がなかった。多分子供たちを叱りつけて、それで不愉快になっているにちがいがなかった。目白三平は、靴を脱ぎながら、彼女に代って、われとわが身を慰めることにした。

「目白三平よ。今日はひどい吹き降りで大変だったな。いや、雨なんかたいしたことはないんだ。あのうるさい上役を説得したのは大成功だった。よくやったぞ、目白三平」

そんなことを呟きながら、目白三平は、自分の書齋にしている、玄関の三畳間を通り抜けて、六畳の茶の間へはいって行った。

部屋の真中には、四六時中折畳み式の卓袱台ちゃぶだいがあるが、すでにそれぞれの茶碗や箸がその上に並べられてあり、沢庵たくあんの鉢なども出ていた。目白三平は、腕を組んで、しばらく卓袱台を見下ろしていた。

このごろになってのことだが、茶の間へはいって行っても、自分はどこに坐ったらいのかと、目白三平

は屢々迷うことがある。

この部屋こそ目白家の茶の間なのだから、どこへ坐ろうと勝手な筈だが、その空気が、なんとなく親しく迎え入れてはくれないような気がするのだ。

それに引き換えて、とし江さんの坐る場所は、ちゃんとしまっている。茶の間に続いた六畳間は、高校生年の春木君と、中学三年生の冬木君の勉強部屋になつており、そこから鍵の手になつてお勝手が續いている。それゆえとし江さんは、お勝手から料理を運ぶ場合には、勉強部屋を通過して、茶の間へはいって来る。だから、卓袱台のつつけのところ、彼女の坐る場所になつてゐるのは、最も合理的にちがいない。春木君と冬木君は、とし江さんの右と左に卓袱台をはさんで坐る。したがつて目白三平の場所は、とし江さんの前になるわけだ。

しかし、目白三平の坐るところは、とし江さんの場所のように、牢固として動かしがたいものではない。たとえば、お茶などの時に、目白三平が、ついうっかりして、彼女の場所に坐ろうものなら、

「お父さん、そこはお母さんの場所だよ。こっちへお坐りよ」

と、冬木君から注意されることは間違いないのだ。

その晩目白三平は、迂濶にも、とし江さんの右、つまり春木君の場所に坐つて、見るともなしにテレビを眺めていた。

「お父さん、そこは僕の場所だよ。向こうへ坐つてくれないかな。今夜はテレビを見るんだからね」

春木君は、目白三平の寒々とした心中になどお構いなく言つた。

「そうか。そういうことならばどいてやろう」

目白三平は、もの憂そうに立ちあがると、とし江さんの真前の席に移つて行つた。ここでは、テレビは見ることができない。

テレビは、彼の背後にあるからだ。

目白三平が冬木君に向かって怒り出すこと

目白家一家四人が、夕食の卓袱台をかこんだ時、冬木君が、

「お父さん、今夜はテレビを見たいでしょう。僕が場所を変ってあげるよ。僕はね、今夜はテレビを見てられないんだ。宿題がうんとあるんだ。テレビは見はじめると途中でやめられないんだ」

と言った。

「そこにいても、テレビを見なければいいだろう。もっとかたい意志を養うことが必要だな」

目白三平が、訓戒めいたことを言った。

「そんなことを言わずに、場所を変って下さい。ぜひ頼みます。両手を合わせてお願いします」

冬木君が、ちょっとおどけた格好をして言った。その格好が、四十六歳の目白三平の心に引っかかった。

「なんだ、その馬鹿にしたような調子は。お父さんを、あっちへ行かせたり、こっちへ移したり、いったいお父さんは、どこにいればいいんだ。冗談じゃないぞ。お父さんは、絶対にここを動かんぞ」

目白三平が、次男の冬木君を相手にして、本気に怒り出した。

「あなた、どうなさったんですの。そんなことで怒る

なんて、大人気ないではありませんか。冬木が勉強すると行って、お願いしているんですから、あっさり変ってやったらいかがですの」

とし江さんが、軽蔑したような表情をして、目白三平を見た。

目白三平の現在の心境は、どんなに説明しても、とし江さんや子供たちには理解されないにちがいがなかった。

「冬木を相手にして怒り出したのは失敗だが、家へ帰って来ても、近ごろ俺は、一人だけ除け者にされているような気がするんだ。その孤独感がやりきれなくて、つい冬木にあたり散らしてしまったんだ」と、心の中で呟くと、目白三平は、黙って立ちあがった。冬木君は、早速目白三平の席へ移ると、何事もなかったかのように、急いで夕食の箸を取った。

目白三平が古道具屋で長火鉢を買い求めること

その二、三日後の土曜日であった。目白三平は、十

二時半に国鉄本社を退けると、どこへも寄らずに、まっすぐ帰って来た。

「これはいかんぞ。こんな心境を続けていれば、最後には俺は、目白家から一人だけ離れて行ってしまふではないか。それは、もちろん俺の不幸だが、同時にまた女房や子供たちをも不幸にすることになるんだぞ」

国電を山手線目白駅で下車した目白三平は、そんなことを呟きながら、駅前の大通りを左へ向かって歩いていた。丁度丸安古道具店の前まで来た時、彼は急に煙草が喫いたくなった。

立ちどまって火をつけると、そのまま古道具店の中へひやかしにはいって行った。

机、洋服筆筒、衝立、屏風、ジュウタンから、フライパン、電気釜、電気冷蔵庫というもののまで陳列されていた。これらのものを次々と見て行くうちに、彼は、奥の隅に、珍しいもの——長火鉢を発見した。

近づいてよく見ると、ケヤキの長火鉢は、相当な年代もので、何十年間、幾代もの人たちが使い古したも

のらしく、方々に傷あとがついていた。

目白三平は、今はどこの家庭でも使っていない、その長火鉢の前に突っ立ってしばらく眺めていた。すると、信州の実家の長火鉢の前に、どっかりとあぐらをかいて、全く横暴極まりないほど、戸主の権利をふりまわして、目白三平たち家族に君臨していた、亡き祖父の姿が思い出されて来たのであった。

「三平！ 早くせんか。何をぐずぐずしているんだ」荒々しく唸鳴り散らす祖父の声までが、遠く信州の方向から聞こえて来るようであった。

続いて、やはり長火鉢の前に坐って、父権を確保し、厳然として家族に命令を下していた父親の姿が、彷彿として彼の目の前に浮かんで来た。

「そうだ。あの古い長火鉢を買ってみよう。あの前にどっかりあぐらをかいて坐っていたら、祖父やおやじ同様の威力は発揮できなくても、女房や子供たちも、多少は俺を認めてくれるだろう。それに、俺の坐る場所がはつきりきまるのは都合がいい。これまでのように、茶の間へはいって行っても、どこへ

坐ったらいいのか迷って、うろろろすることはなくなるんだからな。長火鉢は、何と言っても、茶簞笥の前におくべきだろう。茶簞笥を背にして、女房が長火鉢の向こう側に、俺はこちら側に、一家の主人としての貫禄を見せて、どっかりと坐っている。

女房が茶簞笥の中から、お茶の道具を取り出し、猫板の上におく。ちんちんたぎっている銅壺どうぶの湯を汲んで、お茶をいれる。俺は、女房から茶碗を受取ると、一口飲んでから、テレビを見ている子供たちに向かい、「おい、春木も冬木も、テレビばかり見ていてはいけないな。来年は、二人とも上級の学校へはいるんじゃないか。すぐやめなさい」と、父親らしい重みのある口調でたしなめる。すると、子供たちは、「はい」と返事をして、すぐに隣りの勉強部屋へ引っこんでしまう。続いて俺は、女房にも一言訓戒めいたことを言わなければならない。家計簿をばらばらめくりながら、「今月も赤字のようだが、どうもヤリクリが下手のようだな。もっとしつかりやって貰いたいものだね」と言ってみよう。こんな

ことを言えば、今までの経験では、必ず彼女は、「そんなことをおっしゃっても、なにしろサラリーが少ないんですからね。無理というものですわ。もう少し出世していただきたいわ」と逆襲して来るのだが、今度は事情がちがうのだ。

とにかく俺は、長火鉢の前に貫禄を見せて、どっかり坐っているんだから、流石さすがの女房も、「どうも済みません。みんな私のやり方が悪いんです。来月からは十分に注意いたします」と、あっさり謝ってしまうにちがいない。その時俺は、サラリーの少ない引け目や照れくささなどは飽くまでもおし殺して、「とにかく、うまくやって貰いたいね。来年はいよいよ子供たちの学資も多くなるんだからな」と鷹揚に言って、煙草を取りあげる。ここ何年来そんなことをしたことがない女房が、素早くマッチを擦って火をつけてくれるのだ。

目白三平は、丸安古道具店の年代ものの長火鉢の前で、以上のようなことを空想してから、主人に向かつて、

「この長火鉢はおいくらでしょう」とたずねた。

目白三平が卓袱台の前で虚しい笑いをたてること

丸安古道具店の主人は、少しの間目白三平の顔を見てから、

「お買い下さるんですか。今時長火鉢をお求めになるとは珍しいですな。終戦後からここにおいたのですが、値段をお聞きになったのは、あなたがはじめてです。そうですね。損得を無視して、千円でお譲りいたしましょう。銅壺をつぶして売っても、二、三千円にはなりません。灰がはいっていますから、すぐお使いになれますよ」

と言った。

目白三平は、二人の店員に長火鉢を運ばせて、家へ帰って来た。玄関へ出て来たとし江さんが、おやというような不審げな顔をした。

店員が戻って行くと、とし江さんは、

「長火鉢はどうなさるんですの」

と、目白三平を詰問した。

「茶の間におくんだよ。長火鉢というやつはなかなかいいものだからな。お前と差し向かいで、お茶でも飲みたいね」

「冗談はやめていただきます。狭い茶の間がいよいよ狭くなってしまうではありませんか。長火鉢なんか使っている家はどこにもございませんよ」

「それはそうかも知れないが、銅壺で湯をわかそうじやないか。お茶が飲みたいな」

「お茶の用意はできておりますよ。少し早いけれど、子供たちと一緒にお三時にしましょう」

とし江さんは、かたい口調でそう言うとお勝手へ行ってしまった。

目白三平は、茶簞笥の前に据えられた長火鉢に寄りかかって、煙草を喫い出した。彼の後ろの卓袱台に、とし江さんは、ケーキを盛った皿を並べ、茶碗にお茶を汲んだようであった。春木君と冬木君が、隣りの部屋からやって来て、テレビのスイッチをひねった。

「あなた、お茶がはいりましたよ。こちらへいらっしやいませんか」

と、とし江さんが言った。

「いや、俺はこっちだ」

目白三平が、不機嫌そうに言った。

とし江さんも、それ以上は逆わずに、ケーギの皿と茶碗を、長火鉢の猫板の上に運んで来た。

このようにして、お三時は終わったが、目白三平は、いつまでも長火鉢の前を離れなかった。夕刊を読み、週刊誌をばらばらめくり、煙草を幾本も喫い、夕食の時間まで、威力がある筈の、新しい主人の座をかたく守っているかに見えた。

夕食の準備ができると、とし江さんが、

「夕ご飯もそちらで召しあがりますか」

と言った。

「いや、今度はそっちへ行くよ」

目白三平は、大儀そうに、漸く長火鉢の前を離れ、テレビを背にして、卓袱台の前に坐った。彼が汁を一口吸った時、テレビを見ていたとし江さんと春木君と

冬木君の三人が、声を揃えて、屈託のない明るい笑い声をあげた。それを聞くと、目白三平は慌てて汁の椀を卓袱台の上において、三人の笑い声を追いかけるように、アハハハと笑った。不自然な虚しい笑い声であった。

目白三平は、今ここでみんなと一緒に笑わなければ、永遠に一人だけ取り残されてしまうような不安を覚えたのであった。これといった皮肉でも、当てつけでもなかった。何も知らないとし江さんは、

「あなたって、随分嫌な方ですね。テレビもご覧になっていないのに、私たちと一緒に笑うなんて、どうかしていますわ。何か当てつけがましい感じがいたしますわ。少しどうかしているんじゃないかしら」という顔をして、目白三平を見たのであった。

目白三平がついに父親の權威を失墜する

こと

目白家の茶の間においては、このような小事件は、始終起こっているものであって、少しも珍しいことでは

ない。しかし、その数日後に、冬木君と春木君によって引き起こされた事件は、目白三平のように、大正の初めに生まれ、封建主義華やかな時代に育った者にとっては、驚天動地のできごとと言うべきであった。

夕食後のテレビには、東京のあるサラリーマンが、乏しいサラリーを節約し、ボーナスの大半を貯蓄し、建築資材を少しずつ購入して、基礎工事から家根葺きまで、誰の手も借りずに、立派なブロック建築の自宅を完成するまでの経過が、詳しい説明入りで写し出されていた。このサラリーマンは、三十三歳という若さで、サラリーも特別に多い方ではなかった。

目白三平は、背中を卓袱台^{もやぶだい}にもたせかけるようにして、漫然とテレビを見ていた。その時、中学三年生の冬木君が、テレビから目白三平の方へ顔を向けなおした。冬木君と目があうと、彼は思わずどきりとした。

「中年のおやじが、中学三年生の自分の子供と目をかち合わせて、思わずどきりとしたのは、どうしたことだろう」

目白三平は、その理由を突きとめようとしたのだ

が、何も攪むことはできなかった。

「お父さん、僕いい土地を見つけたんだよ。そこは目白駅から近くて便利がいいんだ。一度見に行ってくれないかな。そしてよかったら、すぐを買っておくといーよ。五十坪だから、丁度手頃な広さだよ。それに、形がだいたい正方形なんだ。土地は、正方形の方が、家の間取りや庭を作る時都合がいいんだよ。それに、南東が、お隣りの広い庭に面しているから、日当りもいいんだ」

冬木君が目を輝かせて、意気こんで言った。目白三平は、どきりとさせられた理由が、ここにいたって漸く分かったのであった。

「冗談じゃないぞ。そう簡単にこの目白辺の土地は手に入れないね。住宅地としては、都内ではいいところだからな。どの辺か知らないが、少なくとも、坪十方は下らないだろう。五十坪で五百万ではないか。家を建てるとなれば、その上百万は必要だからね」

目白三平は、冬木君の勧告にひそかに狼狽しながらも、軽くいなししてしまうつもりであった。

「そういう考え方をしているから、いつまでもお父さんは駄目なんだ。いっぺんに何もかも買おうとするから、何もできないんだよ。家の方は後にしても、せめて土地だけは一日も早く確保しておくんだよ。土地は、毎年二十三%から二十七%くらいずつ値上がりが続いているんだ。買っておくだけで儲かるんだからね。テレビの人は、まだ三十三歳なんだからな。お父さんは四十六歳でしょう。それでまだ借家とは情けないな」

冬木君は、どこで調べたのか、目白三平の知らない数字をあげて説明した。

「中学生というものは、土地のことなど考えずに、勉強だけしていればいいんだよ。土地や家のことは、お父さんにまかしておくものだよ。今になんとかするかね。もう少し待ってくれないか」

目白三平は、閉口して冬木君をたしなめたのだが、その口調は弱々しいものであった。高校三年の春木君は、大人のような表情をして、目白三平と冬木君の会話を聞いていた。ひそかに冬木君を声援しているかに

見えた。

目白三平がとし江さんに向かって苦情を述べること

目白三平は、春木君の顔から、とし江さんの方へ目を移した。そして、彼は急に面白くない顔をした。目白三平の邪推かも知れないけれど、とし江さんも、傍観者の態度で、窮地に陥った彼を、救い出そうとする気配は少しも見えなかった。それどころか彼女は、

「ほんとうに冬木の言う通りだわ。テレビのサラリーマンは、三十三歳で自分の家を建てたんですからね。四十六歳にもなつて、まだ借家住まいというのは、少しダラシないと思いますわ。これまでに、お酒、煙草、コーヒー、それから、パチンコ、麻雀にお使いになったお金を集計すれば、小さな家くらいは建てられるんじゃないかしら。お酒、煙草、コーヒーなどは、多少はやむを得ないとしても、パチンコや麻雀は贅成できませんわ」というかのような顔をして、春木君同様、冬木君に

加勢しているかに見受けられた。

「親愛なるとし江さんよ。こういう時には、俺の味方をしてくれなければ、夫婦の意味がないではないか。俺が今正に父権を失墜させられようという危機に際して、唯一の味方のお前が、傍観しては困るではないか」

目白三平は、心の中で怨み言を呟きながら、とし江さんの方をちらっと眺めた。

窮地に追いやられた目白三平は、昔ならばここで封建おやじの特性を発揮して、

「生意氣言うな。お前たちは、俺のおかげで、平穏な日々を過ごしているのではないか。それを忘れては申しわけないんだぞ」

と威張り散らすところだが、目白家においては、すでにこのセリフは神通力を失っていた。こんな封建的な言葉を吐けば、いよいよ事態を紛糾させるだけだということ、彼は熟知していた。

目白三平が育田首相に文句をつけること

目白三平は、大人も及ばぬほどちゃっかりした冬木君から、大いなる屈辱を受けたのだが、それに耐えてじっと沈黙を守っていた。屈辱とは言ったが、冬木君の言うことは、一応筋が通っていた。冬木君のような考え方の子供が成長すれば、テレビで紹介されたサラリーマン同様、三十歳を出るか出ないうちに、独力で家を建てることは間違いないところだ。考えようによっては、冬木君のような子供にこそ、後事を託すことができるというものではないか。だから、冬木君のような子供をもったことこそ、目白三平は幸運だと思ふべきかも知れないのだ。

「先程俺は冬木に向かって、土地や家のことは、お父さんにまかしておけと言ったのだが、今俺が国鉄を退職したら、退職金はいったいくら貰えるのだろう。子供たちの教育費にあてた残りで家が建てられるものかどうか。とてもそこまで手がまわらぬだろう」

目白三平は、そんなことを呟きながら、ひそかに退職金や共済組合の年金額を計算してみたのであった。